

説教要旨「もう泣かなくともよい」

ルカによる福音書7章11～17節

私たちは死んだ後、自分がどうなるのかわからない。わからないから、この地上で犯した罪に応じて地獄に落とされ、死んだ後も苦しまなければならない。などと想像して死を恐れる。そうした地獄などと呼ばれるような死後の世界を信じないにしても、「死んだら終わり」「死んだら負け」。といった感覚をもっているのではないのでしょうか。そのような疑問を抱く私たちに、聖書は「死んだら終わり」でも「死んだら負け」でもなく「死は勝利」だと言うのです。

「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(コリント一 15 : 54 ~ 55)

どうして「死が勝利」だと言えるのか。それは私たちの信じる神は、「死」さえも覆すことのできる力ある神である。ということです。そして、その力ある神は、私たちのことをどどここまでも愛しておられる方であるということです。

神様は私たちのために、その独り子、主イエス・キリストをこの地上にお送りくださり、そして十字架上の死という悲惨な道を歩ませられました。それほどまでして、私たちにご自分の愛を伝えてくださったのです。そして主イエス・キリストの復活によって、ご自分が死をも支配していることを示されたのです。これほどまでに私たちを愛してくださっている神様が、私たちを死んだ後もなお苦しめるはずがないのです。

神様が深い憐れみによって救い主イエス・キリストを遣わして下さり、この主イエスにおいて罪と死の力を打ち破り、新しい命へと私たちを招いて下さっている、ということを知るならば、その主イエスによって一人の若者が復活し、死の支配の下で絶望の涙を流していた母親が、気休めではない、本当の慰めを与えられたというこの出来事が本当にあったと信じることができるのです。

(2018・9・30 説教者：稲垣真実)